



新・茶捕物帳

青い春の雨
笹沢左保

青い春の雨

笹沢左保

新・一茶捕物帳
青い春の雨

一九九一年十月三十日 初版発行

著 者 ——— 笹沢左保

発行者 ——— 角川春樹

発行所 ——— 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―一三―三

〒102 振替東京三―一九五二〇八

電話／営業部〇三―三八一七―八五二一

編集部〇三―三八一七―八四五一



印刷所 ——— 大日本印刷株式会社

製本所 ——— 株式会社鈴木製本所

定価はカバーに明記してあります。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送り
ください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Printed in Japan ISBN4-04-872663-3 C0093

新・一茶捕物帳

青い春の雨

装画 蓬田やすひろ
装丁 久保内祐子

目次

第一話	遠くの道の泥	5
第二話	大声に罪なし	45
第三話	青い春の雨	85
第四話	虻 あぶ は一匹なり	125
第五話	菜の花心中	165
第六話	嫉妬して涼風	205

第一話

遠く の道 の泥

壺

江戸の正月というのは、あわただしく忙しない。

人声も物音も聞こえない静かな町内が、正月ほどのどかに感じられることはない。そうした雰囲気の中で、のんびりと正月を過ごす――。

そんなことは、とても望めなかった。活気に満ちることは結構だが、祭礼の最中のようなもので何とも落ち着かない。どうして、そんなに忙しいのか。

お祝いづくめで、行事がぎっしり詰まっているためなのである。江戸というところは、特に江戸城の動静に敏感だった。別世界とは知りつつも、町人たちは江戸城での行事に影響される。

元旦がんたんからして、御三家と譜代大名の登城となる。江戸の町は万歳まんざい、獅子舞ししまい、太神楽たいかぐら、鳥追い、白酒売りなどで賑にぎわう。縁起ものだから、庶民も無視はできない。

正月二日は、大名の総登城である。それだけでも、江戸中が何となく騒がしくなる。それに加

えて、町人はこぞつてこの日から年始回りに出かける。

魚河岸の初売り、出初め、初荷もこの日なので、大した人出となる。子どもたちは、手習いの師匠のもとへ書初めにに向く。宝舟の売り声が、絶え間なく聞こえてくる。

三日は大名の嫡子の総登城。

六日は、六日年越しといって雑煮を祝い、門松を取らなければならない。

七日は七日正月、若菜の節句なので七草粥を祝う。この日も、大名は総登城。

十一日は武家が具足開き、町家が蔵開き、総じて鏡開きともいう。

十四日は十四日年越しで、雑煮を祝ってお飾りを取りはずす。

十五日は小正月なので、十五日粥と称する小豆粥を祝う。

このほかに町内の催し物、親しい連中が集まつの宴会、仲間の若い衆だけが顔をそろえての恒例の行事と、いくらでも祝いが重なるのである。

深川の靈巖寺の裏門前町でも、一月十二日にそうした町内の祝いの集まりがあった。その由来については定かでないが、なぜか豆腐だけを食べて酒盛りをするという変わった宴会だった。

古くは靈岸島にあった靈巖寺が明暦の大火で全焼し、深川のこの地に移つて来たのが万治二年。それから約三十年後に、裏門前町の豆腐祝いの行事は始まったという。

靈巖寺裏門前町の一月十二日の豆腐祝いは、この寛政三年まですでに百年も続いているわけである。伝統ある行事だが、いまだに町内の人間しか参加させないということでも知られていた。

町内の住民である限り、成年の男女なら誰でも加われる。宴会は正午から、靈巖寺の宿坊の大

広間を借りて始まる。ひとり当たり三丁の豆腐が、全員に配られる。

薬味はネギだけで、醬油しょうゆをつけて食べる。肴さかなはほかにまったくなしで、酒を飲むのであった。そのせいか年寄りを除くと、女はほとんど出席しない。

男衆ばかりで色気がないから、酒宴も静かなもので馬鹿騒ぎにはならない。靈巖寺の広大な境内と、七堂伽藍しちどうがらんを眺めての豆腐祝いであった。

靈巖寺の総門内にある地藏尊は、江戸六地藏のひとつとして有名だった。また靈巖寺の塔頭たつちゆうには、奈良屋茂左衛門なげやもざえもんと紀伊国屋文左衛門きのくにやぶんざえもんの墓がある。

その靈巖寺の宿坊へ四ツ半、午前十一時に豆腐が届く。深川一の豆腐商「きよ源げん」で、夜を徹して作られた豆腐三百丁余りが、深川元町もとから荷車で運ばれてくる。

ところが、今年の一月十二日にはちよつとした事故があった。

それには、陽気が絡んでいた。この年の正月は三ヶ日が春そのものの暖かさ、四日から霜が凍って滑るくらいに厳しい寒さとなった。七日に降り出した雪は、九日までやまなかった。

大雪だった。江戸の雪としては、よく積もったほうである。だが、十日からは晴天続きで、これにまた汗ばむようなポカポカ陽気となった。

雪解けが、一斉に始まった。十一日のうちには大雪も、あらかた消えてしまった。江戸の人家の屋根と、日当たりのいい地面はすっかり乾いていた。

しかし、場所によっては何よりも、歩くのに始末が悪い状況となった。日向ひなたにならない道路が、そうであった。まだ雪解けの途中で、路面がぬかっている。

それを通行人の足が、朝から晩まで踏み荒らす。いいように、泥をこねくり返す。まるで、泥沼のようなぬかるみになる。そんな道が江戸中には、数えきれないほど残っていた。

靈巖寺裏門前町にも、そうした悪路ができていた。裏門前町の北寄りで、東側の万祥寺、南側の善徳寺、西側の立花豊前守の上屋敷が、三方から包むように日蔭ひかげにしている道であった。

一月十二日の四ツ半に、『きよ源』の荷車がそこへさしかかった。荷車のうえに水槽をしつかりと縛りつけて、その水の中にたくさん豆腐が浮いている。

かなり重いので、威勢のいい若い衆が五人がかりで荷車を動かす。一台、二台と無事にぬかるみを通したが、最後の荷車がいけなかった。

さんざ荒らされたあとのぬかるみに、片方の車が深く沈んだ。これはいけないと、荷車の方向を変える。それで別の轍わだちにはまってしまい、荷車は大きく傾いた。

水と豆腐が、ドツと溢あふれ出る。すでに通過した荷車を押している若い衆たち、それに通行人も駆けつけて懸命に横転を防いだ。何とか押し戻された荷車は、水平を保ってぬかるみを脱出した。水と一緒に溢れ出た豆腐は二十丁余りで、哀れにもぬかるみの中で踏みつぶされていた。それでも最小限の損失ですんだことになり、豆腐祝いには支障を来たさなかつたのである。

その夜、裏門前町の路上で人が殺された――。

昼間、二十丁ほどの豆腐を食ってしまったぬかるみの中に、死骸しがいは転がっていた。ぬかるみの死骸に気づいたのは、裏門前町の自身番の定番じょうばんであった。

靈巖寺裏門前町の自身番は、立花家の上屋敷の近くに位置していた。豆腐を食ったぬかるみか

らも、大して離れていなかった。そのとき裏門前町の自身番には二人の定番がいたが、一方が何気なく道へ出てみて死骸を見つけたのだ。

時刻は五ツ半、午後九時である。夜更けというほど、遅くはなかった。まだ町木戸も、閉じられてはいない。死骸は職人風の男、三十七か八、心の臓をひと突きにされていた。財布は、手つかずだった。

そこへ、運も悪ければ間も悪い、という男がやって来た。

北町奉行所の定廻り同心、片山九十郎であつた。

いかに多忙を極める町奉行所の廻り方といえども、この時刻に各町内の自身番を巡回して歩くということはなかった。普通ならいまごろは八丁堀の屋敷で、床につく前の寛いだ時間を過ごしているだろう。

それが今夜は、すっかり遅くなつてしまった。昼間からずっと深川界隈を巡回していたのだが、立ち寄る先々で明けてましておめでとうございまずと引き止められた。

新年の挨拶となれば、邪険にあしらつて背を向けるわけにはいかない。あちこちで次第に尻が長くなり、しまいには伊勢崎町の知り合ひのところで、いいご機嫌で話し込んだりした。

その合間には、ちゃんと各町内の自身番に声をかけている。そこは律儀な面もある四十男の片山九十郎、定廻りのコースをきちんとたどつて、靈巖寺裏門前町まで足を運んで来たのだつた。

ただし、裏門前町の自身番を最後に、今夜は切り上げるつもりでいた。どうせ裏門前町にも、何かあるということはないだろう。だからこれで終わりだと、片山九十郎が高をくくつていたこ

とは確かであつた。

だが、運が悪すぎて、間も悪すぎた。先頭を北町奉行所の御用提燈ごようちようちんを持った中間ちゅうけんが行き、そのあとを片山九十郎が悠然と歩く。九十郎の両側には岡つ引おかづきとその二人の手先、後ろに御用箱を担いだ小者こものが従っている。

そうした片山九十郎の一行に気づいて、喜んだのは裏門前町の自身番の定番たちだった。こんな時刻に定廻り同心の巡回があるとは、奇跡のように信じ難いことなのだ。

「これはこれは片山さま、お役目ご苦労さまにございます」

おかげですべてを奉行所に任せられますと、ペコペコ頭を下げる定番の顔には書いてあつた。

「何の騒ぎだい、こいつは……」

片山九十郎は、大いに面喰めんぐらつた。

通りの真ん中に、ぬかるみが広がっている。それを町内の数十人の男女が、離れたところから眺めやっていた。自身番の提燈が照らし出しているのは、人の寝姿を覆っているムシロであつた。「刃物で心の臓をひと突き、人手にかかった死骸でございます」

定番が、手を揉み合わせた。

「人殺しかい」

片山九十郎は、あつけにとられていた。

何たることだと、齒を噛み鳴らしたくなる。だが、その前にがつくり来て、九十郎の身体からだから力が抜けた。酔いがいつべんに醒さめると同時に、今日一日の疲れが九十郎の腰に出た。

「つい、いしましたが、わたくしが見つけましてございます」

定番は九十郎を、死骸の近くまで案内しようとした。

ところが、九十郎はぬかるみの縁に立つて、そのまま動かうとしなかった。ぬかるみの中へ踏み込めば、雪駄と裏白の紺足袋が泥だらけになるからだった。代わりに九十郎は、岡っ引の次郎吉を顎でしゃくつた。

「へい」

岡っ引の次郎吉は死骸に近づいて、十手の先でムシロをはねのけた。

二人の手先が、死人の顔に提燈を寄せた。四十に近い男の死に顔は、驚いた表情で固まっていた。着物の左胸を染めた血の色が、まだ光っているように赤かった。

「どこかで、見たような面だ」

ぬかるみにはいないという横着を決め込んで、片山九十郎は一間ほど離れた位置から死骸を眺めた。

「荷物も提燈も持っておりませんし、そう遠くないところの住人でございましょう。それにどうやら、奪われたものもないようでございます。一両と一分金、銭二十六文のはいった財布が、懷中にちゃんと残っております」

定番がそう報告した。

「あまり遠くねえところから、この町内の知り人を訪ねて来て、その帰りに襲われたってことか。だったら、その訪ねた先つてのを捜し当てるのは、造作もねえことだろうよ。なあ、次郎吉」

九十郎はそれとなく、岡つ引の次郎吉に指示を与えた。

「へい」

次郎吉と二人の手先は、三方へ散つていった。

貳

靈巖寺裏門前町の自身番に、片山九十郎はひとまず落ち着いた。こうなつたからには、せめて殺された男の身元ぐらひは突きとめないと、動きがとれまいと覚悟したのだつた。

身元さえ明らかになれば、家人を呼びにやつて、九十郎もいちおう役目を果たしたことになる。今夜はこれで打ち切り、調べは明日改めてということ、九十郎も八丁堀の役宅へ帰れるのであつた。

りゅうきめうだたみ

琉球^{りゅうきめうだたみ}畳に腰を落としたが、九十郎には何となく元気がない。今夜もそれほど寒くないので、囲炉裏の炭火は恋しくなかつた。囲炉裏には背を向けて、土間でムシロをかぶっている死骸を、ぼんやり見ているしかない。とにかく、疲れているのだ。

「通りすがりにいきなり刺して、あつという間に下手人は逃げ去つたのでございましょうね」
定番のひとりが、湯吞^{ゆのみ}を差し出した。

「まだ、人通りはあつたんだろう」

盆のうえの湯呑を手にしたときは番茶だと思つたが、湯氣の匂^{にお}いを嗅^かいで九十郎にも酒だとわ